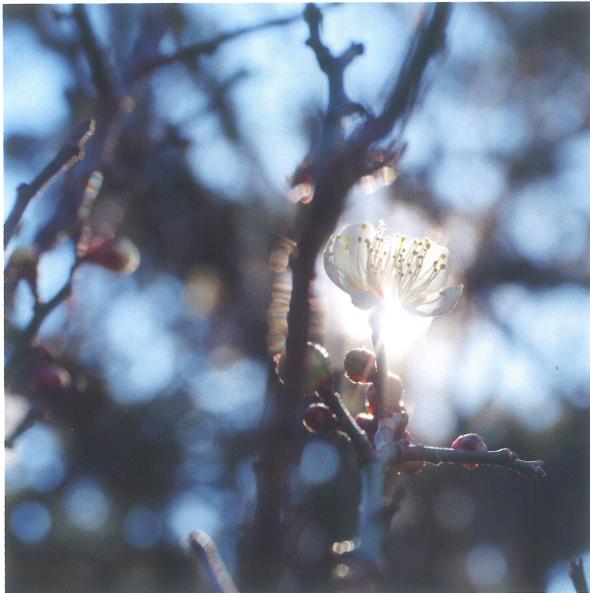


円 覚

令和3年 春ひがん号

333号



赤肉團上 有一無位 眞人

円覺南嶺

臨濟の教えに学ぶ

管長 横田南嶺



三つの教え

令和三年は、新年早々一都三県の緊急事態宣言から始まりました。やがて収まってゆくのであろうと思いながらも、影響が長引くと不安な気持ちになりがちであります。

そんな時にこそ、禅の教えを学ぶことであります。円覚寺は臨済宗でありますので、臨済禪師の教えをもとに建立されています。そこで宗祖臨済禪師の教えに学んでみたいと思います。

臨済禪師の教えを学ぼうと思えば、その語録である『臨済錄』を読むのが一番であります。ただ今は岩波文庫に現代語訳もございます。現代語訳があるとはいえ、なかなか

臨濟禪師は西暦八六七年、今から

千百五十四年前にお亡くなりになつています。五年前の平成二十八年に千百五十年忌の法要を勤めました。残念ながら生年がつきりしていませんので、おいくつで亡くなつたかは不明です。

円覚333号目次

管長猊下 色紙	表紙II
臨濟の教えに学ぶ／横田 南嶺	1
信心ことはじめ ②	10
みとりのこころ(二)／鈴木 秀子	12
鈴木大拙の言葉と生涯(二)／蓮沼 直應	22
春の冷え／桜井 竜生	28

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

かその内容を理解するのは容易ではありません。

ここでは、今わたくしたちが『臨濟録』から、何を学ぶべきかを、次の三つの要点にまとめてみます。

一、無位の真人

—自己の素晴らしさに目覚める。

二、随處に主と作る

—どんなところでも主体性を持つ。

三、活潑^{かっぱく}灑^{ぱく}灑^{ぱく}地^ち

—いきいきと生きる。

どんな時代になろうとも、どんな困難な状況になろうとも、常に自分自身の足元を見つめて、自己の素晴らしさに目覚めることが第一です。

お互いのこの身に地位や名譽や財産や学歴や男女などに汚されることのない本当の

自己の素晴らしさに目覚めた人

「無位の真人」というのが、臨濟禪師のお説法として有名なのです。「あなたの方の身上にあふれ、きわめて勢いのよいこと」と説明されています。

何の位にも属さぬ真人がいる。それが顔から出入りしている。まだ確認しておらぬ者は、今こそ看とどけよ」と示されました。

目で物を見たり、耳で音を聞いたり、鼻で匂いを嗅いだり、舌で味わったり、身体に触れて感じたり、というこのはたらきこそが真人のはたらきだというのです。

こんな臨濟禪師の教えが、世の中に大きな影響を与えたことがありました。明治時代の話であります。今日では、男女とも平等の参政権があるというのは当たり前のようになっています。うに思っていますが、この実現には苦労がありました。そんな男女平等の女性解放運動に大きな力を発揮したのが、平塚らいて

うという方であります。らいてうについて『広辞苑』を見ますと、「女性運動家。本名、明。東京生れ。日本女子大卒。雑誌『青鞆^{せいとく}』

創刊。「新しい女」という非難に抗して、婦人参政権運動に尽力。第二次大戦後も女性解放・反戦平和運動に活躍。自伝『元始、女性は太陽であつた』。(1886～1971)と書かれています。女性の参政権は戦後になってようやく認められたものでした。

その女性解放運動家として活躍した平塚らいてうが仏教に触れた縁というのは、たまたま訪ねた友人の部屋に置いてあった『禅海一瀾』という書物を読んだことでありました。北洪川老師の著書であります。これは儒教と禅との一致を説いた書物であり、『大学

自分がいます。自分が善いことをした時は、心の底から喜ぶし、逆に悪いことをした時には、真摯に反省します。周りの人々の言葉に惑わされず、心静かで確かな目を持つて見ることのできる自分がいます。

自分を忘れて人々の幸福を心より願うような素晴らしい自分が本来具^{そな}わっています。その素晴らしさに目覚めて、どんなところでも主体性を持つて、いきいきと生きるのは難しい言葉ですが、『広辞苑』には「気力にあふれ、きわめて勢いのよいこと」と説明されています。

の難しい言葉ですが、『広辞苑』には「気力にあふれ、きわめて勢いのよいこと」と説明されています。

『論語』『中庸』などの儒書の言葉を用いて禅を説いています。原文はすべて漢文であります。平成三十年に洪川老師の弟子にあたる釈宗演老師の百年忌を迎えた際に、釈宗演老師がこの書を講じた『禪海一瀾講話』を記念に再刊しました。それでも難しいと言わることがありますが、らいとうがこの時に手にした『禪海一瀾』は和綴じ木版刷りの漢文であります。

らいとうが、本を開いて目にした言葉は、「大道は心に求む、外に求むること勿れ、我が心体の妙用は、直に我が大道なり」という一文章でした。もちろんのこと、本には漢文のまま「大道求于心、勿求于外、我心体之妙用、直我大道也」と書かれていたのです。これを目にしたらいとうは、「『大道を外に求めてはいけない、心に求めよ』」といふこ

とばこそ、観念の世界の彷徨に息づまりそうになつてゐる、現在の自分に対する直接の警告のことばではあります。そこで、「わたくしは息をのむ思いで、矢もたてもなくこの本を借りうけて帰りました」というのですから驚きであります。当時の女性たちの教育水準の高さと、またそれと同時に、今北洪川老師の影響力の大きさも改めて思います。

当時既に洪川老師はお亡くなりになつた後であり、らいとうは釈宗演老師の弟子である釈宗活老師に参禅しています。かの夏目漱石が、釈宗演老師に参禅して与えられたのと同じ問題（公案）「父母未生以前本来の面目」に取り組んだのでした。まだ両親から生まれる前の本来の姿はどのようなものかという問題であります。日暮里にある両忘庵と

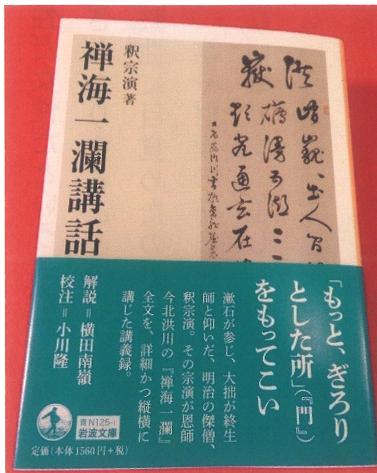


[左]『禪海一瀾講話』2018年 岩波文庫にて再刊 [右] 和綴じの木版刷りより

いう宗活老師の禅道場にらいとうは熱心に通つて参禅していました。

ある日のこと、老師の提唱が始まる前に『坐禅和讃』を皆で読誦していて、「當所即ち蓮華國、この身即ち仏なり」と唱えて、「合掌していた手を膝の上に置こうとした途端に、急霰のように大粒の涙がはらはらと膝の上に落ちて、拭う暇もない」という体験をされました。本来の自己に目覚めたのです。

その時に宗活老師が講義をしていたのが、『臨濟録』であります。「無位の真人、即ち本来の面目が、この肉体より常に出入りてつべんから軀の中をすつと電流のようにつり抜けた感じとともに、その瞬間『わかつた!』と思つたものです」とらいとうの著



解説 小川隆
校注 横田南嶺

禪海一瀾講話

釈宗演著

今北洪川老師



あつた』に書かれています。らいてう二十歳の頃であります。

男性だ女性だということで区別されたり、差別されたりすることのない、人間としての尊厳性に目覚めたのです。生まれはもとより、富や財産の有る無しで差別されることもないのです。誰しもがみんな平等の素晴らしい心を持って生まれている、この真理に気がついたのであります。

『青鞆』の創刊号には、お釈迦様が大悟して、すべての人に仮性が具わっていると説かれたことも紹介されています。それは単に書物を読んで知ったというだけでなく、参禅という体験を経て、大きな確信になつたのです。

このように、らいてうの人間は平等であるという思想は、仏教を学び禅に参じたこ

とから来ているのです。女性解放運動の原点に、『禪海一瀾』や『臨濟録』が深く関わっているのであります。

主体性を持つていきいきと

仮なるものを自己の外に求めてはいけない、真理はどこか遠くにあると思つて探し回つても無駄だと臨濟禪師はくり返し語録の中で説いています。仏とは、今この目の前で話を聞いているあなた自身のことだと説き示されました。そして人にだまされるな、人のことばに振り回されるなど説かれています。

臨濟禪師の教えとは、自分の外に仏を求めて、それにひれ伏すというのではなく、自分自身の尊さに目覚めるというものです。立とうと思つたら、すつと立ち上がる、坐

ろうと思つたら、すつと坐る、服を着たり、ご飯を食べたり、日常の営みのすべては仏の営みだと説かれたのでした。人間に生まれて、生きていることの素晴らしさを説かれたのです。そのことに目覚めて、外に求める心の止んだ人を「無事の人」と言います。「仏とは無事の人だ」と臨濟禪師は説かれています。

そして更に、その尊さに目覚めて、どんな所でもどんな場合でも主体性を持つて、いきいきと生きることを説かされました。

お互いに人として生きるには、主体性が大切です。人間は、半紙一枚でも人から言われて持つていると重たく感じます。ところが、たとえば好きな人の為なら、どんなに重い荷物でも喜んで持つてゆくのです。いやいや歩かされるのは苦痛です。しかし



円覚寺YouTubeチャンネル／令和3年1月の日曜説教「臨濟の教え」

健康の為に自ら歩こうと思つて歩くのは苦痛でも何でもありません。同じことをしていつも違うのであります。臨濟禅師は、「おれでいてはいけない、主体性を持て」と説かれています。しょんぼりしててはせつかくの尊い命が生きていないのです。

世の中のことは、みな生住異滅(shōjūyimoku)をくり返します。生じては住まり、変化して滅するということのくり返しです。これを人間の身にあてはめると、「生老病死」の四つになります。「生」は生まれることに通じます。「住」という存続することが、人間においては、「老」なのであります。「異」という変化することが、人間においては「病」として現れます。「滅」はそのまま「死」にほかなりません。人はその中で、喜んだり悲しんだり嘆いたり一喜一憂をくり返しています。

喜びや怒りの感情も、それぞれ何らかの条件によって生じたものであり、それがしばらく住まり、やがて変化して消えるものに過ぎないのです。そのように知つておけば、冷静に対応できます。それらの感情に振り回されるのではなく、むしろ積極的に主体性を持って生かしてはたらかせることもできるのです。

喜びや怒りの感情も、それぞれ何らかの条件によって生じたものであり、それがしばらく住まり、やがて変化して消えるものに過ぎないのです。そのように知つておけば、冷静に対応できます。それらの感情に振り回されるのではなく、むしろ積極的に主体性を持って生かしてはたらかせることもできるのです。

この度の新型コロナウイルスにしても、「生住異滅」をたどるだけです。何らかの原因によって生じて、しばらく住まり、変化してやがて滅するのです。そのように冷静に知つて、こちらが主体性を持つて、対応してゆくだけだと思つています。

どんな状況でも、自己の素晴らしさに目覚め、自らが主体性を持ち、いきいきと生きるという『臨濟録』の智慧に学んで、道を切り開いてゆきたいものであります。